

# 「ナチュラリスト」の執筆戦略

——モンテーニュにおける「豊かさ」——

山本佳生

## はじめに

十六世紀後半、聴衆を前にした弁論が徐々に衰退する一方、それまで周縁に追いやられていた書簡ジャンルに光が当たる。この時代の作品である『エッセー』にも書簡的要素が多くみられるが、そこでは、献呈先の相手への呼びかけこそあれ、対話と文通の相手は必ずしも求められていない。より正確に言えば、生きている相手は必要とされていない<sup>(1)</sup>。むしろ、モンテーニュはかつて自分で書いた文章を読み直し、それにコメントを加えるか、あるいは古典著者からの引用を証言や意見として挿入し、それらに対する彼自身の判断を付け加える。『エッセー』はこのように宛先を必要としない、自己完結した対話の場だといえる。そのときいままでも書簡的要素として指摘されてきたものも別の意味を持つ。「私は自分の姿を見直すことがきらいで、一度私から漏れ出たものはいやいやながらでなければ決して読み直さない」(III, 9, 1006)ことや、「私は追加はするが訂正はしない」(III, 9, 1008)もしくは、「私は決して最初の思索を第二のもので訂正したりしない」(II, 37, 796)というような態度は、書簡的即興性よりも、モンテーニュの思考の多様性と変動性に近づけて解釈することが可能となるだろう。さらに我々は、彼の文体における「簡潔さ」の要因として、セネカ書簡の文体的模倣というよりも、こうした常に移ろいゆく書き手の状態、事柄の変化を挙げるべきだろう<sup>(2)</sup>。

他方、エラスムス『キケロ主義者』以降のレトリック思潮において、絶対的權威の座から転落したキケロに代わり、セネカが新たな模範として見出される。ここでもう一度モンテーニュのセネカへの評価を問い直してみるのも有益である。第二巻10章ではプルタルコスと比較しながら、両者の作品はともに気質に合い、求める知識が「断片的」に取り扱われていると言ひ、セネカは「努力し、緊張して、怯懦や恐怖などの不徳に対して徳で武装させようとする」のに対し、プルタルコスは「これらの悪徳の力を高くは買わず、そのために足早になったり身構えたりするのを馬鹿にしているように見える」と評価する。またセネカは警句によって人を刺激し興奮させるのに対し、プルタルコスは事柄の豊富さによって人を満足させ、よりよき報いを与え、人を導く」(II, 10, 433-434)。自分の文体に関しても「私の傾向からはセネカの話し方を真似たくなるが、やはりプルタルコスの話し方がすぐれていると思わずにはいられない」(II, 17, 638)というように全体

として後者を高く評価しているのがみられる。モンテーニュは我々が思い描いているほど、また彼と親しいリブシウスほど「セネカ主義者」ではないことが以上の記述から読み取れる。むしろ、モンテーニュがセネカの文体の鋭さより高く評価するのは、プルタルコスであり、その主題の豊かさにほかならない。

この観点は、モンテーニュが事柄の空疎さを「風」に喩えた箇所からも逆説的に明らかにできる（以下強調はすべて引用者による）。当時行われていた教育は判断力や良心を養うものではなく、教師たちは知識を「口先にのせて、吐き出し、風にまき散らすだけ（ainsi nos pedantes vont pillotans la science dans les livres, et ne la logent qu'au bout de leurs lèvres, pour la dégorger seulement, et mettre au vent）」である（I, 24, 141）。さらに人間は本来虚ろで空っぽなのだから、「風や言葉で自分を満たすのではなく（ce n'est pas de vent et de voix que nous avons à nous remplir）」、しっかりとした実質によって満たすべきだとモンテーニュは主張する（II, 16, 656）。ところで、こうした内容のない言論の代表例こそほかならぬキケロであり、彼の作品の読書からは「ただ風しか見出せない（je n'y treuve que du vent）」（II, 10, 434）。反対に、プルタルコスは言葉によって事柄を学んだのではなく、事柄から言葉を知ったというが、それはウェルギリウスやルクレティウスの詩も同様であり、意味が言葉を照らし、生み出す。そのとき、言葉は「単なる風ではなく、肉であり骨であり（non plus de vent, ains de chair et d'os）」、言っている以上の意味をあらわすという（III, 5, 916）。

このように、空疎な雄弁の代表であるキケロへの反感として対置されるのは、セネカの簡潔さよりもむしろ、プルタルコスの豊かさである。本稿はこの点から出発して、『エッセー』における「豊かさ」について、まずはモンテーニュがそれをどのように実現するのか見ていき、次にそれが植物のイメージで語られている点を分析したい。最後に、そうしたイメージとモンテーニュの執筆行為の関連性についての考察を加えたい。

## 1. 「胚胎」される豊かさ

### 灰めかしの技法

キケロの雄弁に対する反感、そしてレトリックへの不信のもとで目指される「豊かさ」は当然のことながら一般的に想定されるものとは異なる。A. Compagnon が指摘するように、それらは従来の「増幅拡充 *amplificatio*」によるものではない<sup>(3)</sup>。モンテーニュに見られる簡潔さは文章の断片性によるものであり、逆説的にそれらが豊かさを生み出している。一つ的话题を展開し、連続して文章をつなぎあわせ、「言葉の豊かさ」を生み出すのではなく、文章を区切り、いくつも話題を詰め込むことによって『エッセー』の言論は「事柄の豊かさ」を実現しているのだ<sup>(4)</sup>。これはエラスムスが『言葉と事柄の豊かさ』のなかで目指した、少ない言葉で多くの事柄をあらわすという理想の延長線上に置くこともできるが、モンテーニュはさらに一歩先に進んで、この「豊か

さ」を隠れた状態にしようとしている。我々はその際彼が用いる技法について、古典レトリックにおける「含意法 *emphasis*」を比較参照しながら以下明らかにしていく。

クインティリアヌスは『弁論家の教育』のなかで二度、この技法について論じている。まず第八巻では、言っていること以上のものをあらわし、言っていないことまで示す技法<sup>(5)</sup>、とされる。次に、第九巻においては、言葉が意味するのとは別の事柄を指し示す技法であり、いわば聞き手がその隠れた意味を見つけ出さなければならない<sup>(6)</sup>、と説明されている。いずれの場合も、聞き手が意味を補ったり、あるいは含意されている意味を読み取ったりして理解することが求められる。

これをうまく利用したのがストア主義に傾倒したセネカでありリプシウスである。セネカは書簡 94 において哲学は行動を促すと言い、そのために鋭く、短い表現が適切であると述べる。というのも、簡潔な言葉は我々の魂のうちにある高貴な本能を刺激し、それらが現れるように促すからだ<sup>(7)</sup>。この考えを発展させたのが書簡 120 であり、そこでは自然は教訓それ自体を我々に与えるのではなく、教訓の種子を与えるのだと述べられる<sup>(8)</sup>。これが意味するのは、我々自身がその種子を観察や行為の比較によって発芽させることである。隠れた意味、言葉が意味する以上の事柄を読み取らせるという修辞技法はここで、聞き手や読者自身が教訓、モラルの意味を発見することへと変えられている<sup>(9)</sup>。

リプシウスは 1591 年の『書簡教程』において簡潔さを称揚し、セネカを「大人のレトリック<sup>(10)</sup>」の手本として据えて以来、ますます短く引き締まった文章を志向するようになるが、彼において含意法はセネカ同様、モラルを指し示すものでありつつ、同時に彼自身の真実性をも明らかにする。というのも、リプシウスが推奨するような、みずからの本性に適合した文体において仄めかしは、書き手自身の考えと事柄の本性への忠実さとして理解され、正当化されるからだ<sup>(11)</sup>。つまり、あからさまに言うことを避けることで、リプシウスは読者が真実を発見し、納得するように誘導する。

こうしたモラル、哲学的真実を発見させる含意法とは異なり、モンテーニュにおけるそれは表現、措辞より、発想と配置に関係した仄めかしである<sup>(12)</sup>。

### 配列の錯綜、発想の「種子」

第三巻 9 章において『エッセー』の配列の無頓着さについて弁明している箇所に注目しよう。「私はさまよっている。だが不注意からではなく、好きでさまよっているのである。私の思想はお互いに続いている。しかしときにはずっと遠くから続いている。互いに見つめ合っているが、藪にらみで見つめ合っている<sup>(13)</sup>」とモンテーニュはみずからの言論の展開が変則的であることを擁護する。また「私は内容がひとりで誰にも明らかにわかるものであってほしい。どこが変わり目か、どこが結びか、どこが始まりか、どこで話がもとに戻るかということが、弱く不注意な耳のために連結する言葉を挿入しなくとも、十分にわかるものであってほしい<sup>(14)</sup>」と一般的なレト

リックの配列を拒否しながら、注意深く読むことを求める。これは語の不完全さによって明らかにされていない意味を暗示する、措辞における含意法というよりも、無秩序な配列のうちに読者を引き込み、意味を悟らせる配置における含意法である。「私は私の重さで読者の興味を引き留めることができないから、せめて私の錯綜でそれを引き留めることができれば、『それでもやはり勝ちである』<sup>(15)</sup>」。

このような配列の混乱に加え、主題についても、それらを不完全な形で詰め込むことで読者に意味を補わせ、より多くの主題の材料を発見させるように誘う。

私の思い違いでなければ、私以上に内容において手掛かりを与える者がほかにいるだろうか。また、方法の上手い下手はともかくとして、いかなる著者が私以上に紙の上に材料の種を播き、あるいは少なくとも厚く播いたか。私はできるだけたくさんの材料を並べるため、その頭の部分だけを詰め込んだ。その続きまで入れたら、この書物は何倍にも膨れ上がったことだろう。また、私何の意味もない話をたくさん広げたが、少し巧みに皮を剥いていける人なら、そこから無限の「エッセー」を引き出せるはずだ。そうした話にしても、私の引用にしても、必ずしも単なる実例と権威と装飾の役割を果たしているわけではなく、私自身もそれらを自分の役に立ちさえすればいいと思っているわけではない。それらはしばしば私の意図を超えて、より豊かで、大胆な材料の種を含んでいるのだ。それは、それ以上言うことが憚られる私にとっても、私の趣旨に賛成してくれる人々にとっても、一段と微妙な音を斜めに響かせてくれる。(I, 39, 255)

ここで言及されている「種子」はセネカ的なモラルに関するものとは異なり、『エッセー』の主題の発想に関連するものだ<sup>(16)</sup>。先に見た配列の乱雑さと、断片的に挿入された引用や借用は、読者の注意を引き、文章が表現する以上の意味を読み取らせるだろう。含意法は本来、言葉がその字面以上のもを表現する修辞方法であるが、モンテーニュはこれを内容の次元において実現しようとしている。「賢明な読者はしばしば、他人の書物のなかに著者がそこに描いたと認める完璧さとは違ったものを発見し、それに一段と豊富な意味と相貌を付け加える」(I, 23, 132)。モンテーニュはこうしたレトリック的操作によって、読者が『エッセー』のうちに、より一層の「豊かさ」を見つけ出すのを期待しているのだ。

このような実質以上の内容の「豊かさ」を含んだ状態を、『エッセー』のところどころで見られる「着想 conception」という概念と接近させることができる。たとえば、「ウェルギリウスの詩句について」の章では、ウェルギリウスとルクレティウスの詩が、言葉の美しさ以上に、その優れた想像によって、品位を高め、内容を増しているという(III, 5, 916)。この適切で洗練された表現を支える、力強く充実した思想こそ「着想」であり、それは、内的な思考とそれを表現する言葉という二項対立で古くから認識されてきたように、潜在的なものである<sup>(17)</sup>。この観点からすれば、モンテーニュが上の引用で述べているような、「より豊かで、大胆な材料の種」はまさしく「着想」にはかならない。モンテーニュは、「豊かさ」をあからさまに示すのではなく、配列の錯綜や、借

用物の不完全な形での詰め込みによって隠し、一段とその効果を発揮させているのだ。

ところで、ここで語られた「種子」のイメージは「花」や「畑」といったイメージと関連させることによってその意味がより明確になるだろう。特に「花」のイメージは当時流行していたコンプレックスブックや詩句のコレクションの編集者たちが、引用文の多様さを誇るのに用いたイメージであり、また中世以来の詞華集の伝統を思い起こさせるものだ。次に我々はこれらのイメージの分析によって『エッセー』と同時代に流行したコンプレックスブックとの差異をより明瞭にし、多くの引用を並べる前者がどの点において後者と区別されるのかについて考えていきたい。

## 2. 植物イメージ

### 畑

当初の計画において、モンテーニュは余生を平穩のうちに、精神を無為のうちに過ごすことを考えていたが、精神というものはなにか没頭する対象がなければあちらこちらへとさまよい、果てには妄想や空想の怪物を生み出すようにまでなってしまう。それは手入れもされず放置された畑と同じである。「どんなに豊饒で肥沃な土地でも、遊ばせておくと色々な種類の無益な雑草が繁茂する。これを役立つようにするには、秩序正しく、何らかの種を播いて働かせるようにしなければならない」(I, 8, 54)。畑に種をまいて使えるようにし、作物を生み出せる状態にすること。これは妊娠と出産にも当てはまる。「また、女は一人でも形のない肉塊〔線維種 *fibrome* のこと〕を生むことがあるが、立派で自然な子供を産むためには、別の種を植え付けてもらわねばならない」(*ibid.*)。これらはいずれもプルタルコスに見られるイメージであるが<sup>(18)</sup>、プルタルコスが伝える限りでは、こうした種はセネカ同様、徳を胚胎したものであり、教育によってそれらを発芽させることが説かれている。

他方、エラスムスは『キケロ主義者』のなかで、読書から得た範例、逸話などを、肥料に、そして思索し、文章を彫琢していくことを、畑を耕し、雑草を除去する作業に重ねあわせる。種子を発芽させ、育てることが読書と執筆のメタファーとして機能している<sup>(19)</sup>。同様のことがモンテーニュにもあてはまるだろう。彼は無為のうちに精神が生み出す「妄想や空想の怪物」を記録するのみならず、それらをみずからの経験や読書で得た知識を活かして発展させ、気ままに論じ、何度も読み直し、加筆することで、『エッセー』を作品の形にする。つまりみずから播いた「種子」を発芽させ、育てあげたのだ。この点において彼の「畑 *terre*」は「花壇 *parterre*」すなわち、古典著者からの引用——見事な花々——を植え替えた場所とは区別されるだろう<sup>(20)</sup>。このようにモンテーニュにとって「畑」はセネカ的なモラルの種を播くためのものでも、引用句を単に移し替え並べるためのものでもない。

## 花

「誰かが私のことを、著作の中に他人の花を積み重ねるだけで、自分のものはそれらを束ねる糸しか出していないと言うかもしれない。たしかにこうした借り物の装飾が常につきまとうていると見られるのは仕方のないことだ。けれども、この装飾で私を覆い隠すつもりはない。それは私の意図とは逆である。私は自分のものだけを、それも生まれついでのものだけを示したい」(III, 12, 1085)。また「私の土地がそこに播かれている立派な花々のどの一つも咲かすことができないし、私自身の畑にできた果実を全部合わせてもそれらに匹敵できないということをよく承知している」(II, 10, 429)とモンテーニュは言う。ここでも「花」は古典著者からの引用を指し、それと区別するように「土地」や「畑」、そして「果実」について語られているが、これらは引用と模倣の問題と関係する。「花」である古典著者の文章は、到達できない高みにある。だがモンテーニュ自身の意図は、それらを模倣することでも、乗り越えることでもない。彼が望むのは、すでに上の引用で見たように、生まれつきの自分自身のものを見せることである。

とはいえ、引用や借用は、この時代のレトリック、特に高等法院における「引用のレトリック」に不可欠であり、仮にも司法官の端くれであったモンテーニュにとっても、非常に親しみ深いものであった。一般的に、没个性的で教養を誇示するために用いられるような「引用のレトリック」を、どのように個性的な言論へ昇華するかがモンテーニュにとっての問題である<sup>(21)</sup>。その際、彼の執筆戦略は、「自然」と「技巧」という古代以来の対立に関係したものとなる。

### 3. 「ナチュラルリスト」

『エッセー』のところどころでモンテーニュはペダントイズムと過度の技巧を告発する。それらは精神の怠惰さ、名誉欲のあらわれであり、さらには判断力の欠如を意味する。コモンプレイスブックなどの参照用書籍もまた、こうした学問、技巧に属するものであり、それらが助長する過度の引用はまさに「スコラ的<sup>(22)</sup>」で非難されるべきものである。それに対してモンテーニュがみずからのレトリックの方法として選択するのは、そうした引用、つまり自分の文章とは区別される借用物に「何か特殊な意味を与えて別なものにする<sup>(23)</sup>」ことである。これを彼は「創意 invention」と呼び、その実践者である自分自身を含めて、「ナチュラルリスト naturaliste」と自称する。ところで、この「ナチュラルリスト」という語に含まれる「自然 nature」は、この場合、伝統的な「自然」と「技巧」の対立関係に還元されることはない。というのも、モンテーニュがおこなっている「特殊な意味を与えること」は一種の技巧にほかならないからだ。ほかの箇所では彼が述べているような、無垢な自然とそれを台無しにする技巧という関係性ではこの「ナチュラルリスト」という語の意味を理解することはできない。

『弁論家の教育』においてクインティリアヌスは「自然」とそれを調教する「技巧」の関係につ

いて述べている。基本的には自然の価値が優位におかれ、技巧が平凡であるかぎり、自然のもたらすもののほうが豊かだとされる。しかし、ときとして完璧な技巧というものがある。その場合は技巧によってもたらされるもののほうが、元の豊かな自然よりも優れたものである。これをクインティリアヌスは「農夫」のイメージで語る。

肥えていない土地からは、最高の農夫でさえなにも収穫できず、豊かな土地からは、耕さずともなにか有益なものが生じ、そして、肥沃な土壌では、土地それ自体の良さよりも、耕作する者のほうがより生産的である。(中略) 要するに、素質が養育の素材であり、養育は形作り、素質は形作られる。素材なしに技術はないが、技術がなくとも素材には価値がある。それゆえ究極の技術は最高の素材にまさるのだ (*ars summa materia optima melior*)<sup>(24)</sup>。

「最高の技巧 *summa ars*」を象徴する農夫は、豊かでない畑からは何も収穫できないが、畑それ自体が豊かならば、このうえなく豊かな作物をもたらしすることができる。このアイデアならびにイメージはルネサンス期においてラテン語に対する俗語の運用という領域に転用される。

1549年に発表された『フランス語の擁護と顕揚』の第一巻で、デュ・ベレーは言語の起源と本性について説明しつつ、古典語の俗語に対する優位を認める。「なぜフランス語はギリシャ語やラテン語ほど豊かではないのか」と題された第三章のなかで、古典語と俗語は、その本性において優劣があるわけではなく、俗語であるフランス語が貧しいのは土を耕したり茨や棘を取り払ったりしていないからだ、と彼は主張する。ローマ人たちは「良い農夫 *bons Agriculteurs*」のようにラテン語を念入りに耕し、ギリシャ語から多くの言葉を移し替え、「荒れ果てた土地から手なずけられた土地に (*d'un lieu sauvage en un domestique*)<sup>(25)</sup>」改良した。フランス語はまだ貧しいままであるのは、その土地自体が豊かであるにもかかわらず、耕すことができていないからである。

このデュ・ベレーに似た批判をモンテーニュも行う。

我が国の国語は、材料は十分であるが、少し表現が欠けているように思う。実際、我々の狩猟や戦争に関する用語で間に合わないものは一つもなく、何でも借りられる豊かな土地である。また、言葉の形式は、草と同様に移植すると改良され、強くなる。私はフランス語を十分に豊富だと思いが、十分に柔軟でたくましいとは思わない。というのも、それは普通、力強い着想に押しつぶされてしまうからだ。(III, 5, 917)

ここでモンテーニュはフランス語を「豊かな土地」と断言するが、それらはまだ改良の余地がある。力強い「着想 *conception*」つまり、まだ言語化されていない優れた考えを表現するには不十分なのだ。それゆえ、クインティリアヌスの「農夫」のようにこの土地を耕すこと、すなわち「伸ばしたり曲げたりして、一段と力強い、いろいろな用い方をして充実させる」ことが必要である。しかし、それができるのはほんの一部の人間だけであり、その証拠に現代の多くの作家たち

は「かなり大胆で傲慢なために、普通の道をたどることを馬鹿にするが、創意と分別に欠けるために失敗している」。「そこには哀れな、奇をてらう風と、白け、馬鹿げた偽装があるだけで、主題（素材）を高めるどころか、かえってダメにしている」のが見られる。つまり、ここでもまた「創意」が問題となる。現代の作家たちが行っているのはまさしく技巧であるわけだが、新奇さを求めるあまりに人為的になり「創意」に欠けるのだ。こうした陥穽にはまらないように、モンテーニュが取る戦略は次の一文に上手く表現されている。「私は彼らが自然を学術化するのと同じくらいに、学術を自然化するだろう（je naturaliserois l'art, autant comme ils artialisent la nature.）」(III, 5, 916-917)。

入念に準備された弁論が時機に適しないことがあるように、労苦の果てに作り上げられた作品もまた創意に欠けることがある<sup>(26)</sup>。それゆえモンテーニュは、技巧をまったく拒否することではなく、技巧を巧みに隠すこと、あたかもそれとは無関係、無関心であるかのように装うことを選択する<sup>(27)</sup>。そのために彼は記憶に頼ることや記憶の働き自体を放棄し、「偶然で即興的な動作を示すこと」を目指す。なぜなら「なにひとつろくなことを話せないのも困るが、上手い話し方を準備してきたと見られるのもいやだから」であり、これは自分自身にふさわしくないと判断するからだ。(III, 9, 1007) このように技巧に対する意識的な無関心によってモンテーニュはそれを「自然化する *naturaliser*」ことを実践する。

ところでクインティリアヌスによればこうした技巧の跡を隠すことこそ、最高の技巧であるという<sup>(28)</sup>。また、ありのままでなんの工夫もない自然には完璧さはないともいう<sup>(29)</sup>。このことから、自然は技巧を拒否するのではなく、技巧によってこそ完璧なものとなるということが出来る。

こうした見解をふまえると、『エッセー』における「創意」はまさしく最高の技巧を意味するだろう。というのも、引用文に何かしら特殊な意味を与えて、元のものとは異なるものにするという「創意」は、「自然」にある種の工夫を加えることにほかならないからだ。それは技巧の跡を隠す技巧であり、そのようにして生み出されたものは「完璧」なものとなる<sup>(30)</sup>。したがって、モンテーニュのいう「ナチュラリスト」はクインティリアヌスのいう「最高の農夫 *optimus agricola*」と同じである。彼は「創意」という最高の技巧によって、素材つまり「自然」を完全なものに作り変える。つまり、「創意」によって自分の豊かな「畑」を耕すのだ。それはフランス語本来の豊富さを見出し、古典著者たちの引用に見られるような力強い「着想」を自分のものへ変えることにほかならない。そのようにして「ナチュラリスト」たるモンテーニュは古典作品に比肩する水準へと『エッセー』を高めたのだといえよう。

## 注

(1) D. Knop, « Approches rhétoriques des *Essais* », in *Essais : Revue interdisciplinaire d'Humanités*, Hors-série

- 3, 2016, “Usages critiques de Montaigne”, pp. 29-41, とくに p. 31 ; M. Fumaroli も次のように指摘する。  
 « Le monologue des *Essais* n’est pas seulement dialogue de Montaigne avec les “grandes âmes” de Rome et de la Grèce, il est aussi le lieu d’un vaste *Dialogue des morts*. » dans *La diplomatie de l’esprit*, Paris, Gallimard, 1998, p. 149.
- (2) Cf. *Les Essais*, éd. Pléiade, Paris, Gallimard, 2007, III, 2, 845, « La constance mesme n’est autre chose qu’un branle plus languissant. Je ne puis asseurer mon object : il va trouble et chancelant, d’une yvresse<sup>(2)</sup> naturelle. Je le prens en ce point, comme il est, en l’instant que je m’amuse à luy. Je ne peinds pas l’estre, je peinds le passage [...] ». 『エッセー』からの引用は巻、章、頁の順に示す。  
 また G. Hoffmann の指摘する秘書の存在も忘れてはならない。当時の貴族たちが日常的に、秘書に口述筆記させていたという事実を考慮し、さらには、レーモン・スボンの『自然神学』の翻訳における整った完全文と『エッセー』の文体を比較して、後者の口語的で簡潔な文体はそうしたディクテーションによる結果なのではないかと推測した。また、1588年以降の Tournon が仔細に検討した文章の区切りも、黙読ではなく、音読しながら修正を加えた結果であり、書簡的要素とは区別されるのではないかと示唆する。この優れた分析については G. Hoffmann, *Montaigne’s career*, Oxford, Clarendon Press, 1998, ch. 2, “The Company of Secretaries”, pp. 50-55. また次の項目も参照。「Secrétaire(s)» dans *Dictionnaire Montaigne*, dir. P. Desan, Paris, Classiques Garnier, 2018, pp. 1699-1704.
- (3) A. Compagnon, « La brièveté de Montaigne », in *Les formes brèves de la prose et le discours discontinu (XVI<sup>e</sup>-XVII<sup>e</sup> siècles)*, éd. Jean Lafond, Paris, J. Vrin, 1984, p. 14.
- (4) Jean Lafond, « Achèvement / inachèvement dans les *Essais* », in *BSAM*, 7<sup>e</sup> série, vol. 13-16, 1988-89, pp. 180-181 ; id., « Les Formes brèves de la prose et le discours discontinu (XVI<sup>e</sup>-XVII<sup>e</sup> siècles) », dans *Lire, Vivre où mènent les Mots : De Rabelais aux formes brèves de la prose*, Paris, Honoré Champion, 1999, pp. 299-326, とくに, p. 323. また J. Lecointe もモンテーニュの区切りは修辭的効果を狙った対照法や頭語反復ではなく、むしろ語られている内容に即したものであり、それらを「セネカ的」と言うのは尚早だと注意を促している。J. Lecointe, « L’organisation périodique du ‘style coupé’ dans le livre III des *Essais* », in *Styles, Genres, Auteurs*, Press Universitaire de la France, n° 2, 2002, pp. 9-24.
- (5) Quintilien, *L’institution oratoire*, VIII, iii, 83.
- (6) *Ibid.*, IX, ii, 65.
- (7) Sénèque, *Lettres à Lucilius*, tr. Henri Noblot, Paris, Les Belles Lettres, 1964, ep. 94, 29. « *Omnium honestarum rerum semina animi gerunt, quae admonitione excitantur non aliter quam scintilla flatu leui adiuta ignem suum explicat.* »
- (8) *Ibid.*, ep. 120, 4, « *Hoc nos natura docere non potuit : semina nobis scientiae dedit, scientiam non dedit.* » セネカはこのように、偉大な魂を眼前に置き、それを崇めることを求めるが、この考えとロンギノスに帰される『崇高論』との関係を読み解いたのが、A. Michel, « Rhétorique, tragédie, philosophie : Sénèque et le sublime », in *Gionale italiano di filologia*, vol. 2, 1969, pp. 246-257.
- (9) また *Ibid.*, ep. 38, 2, « *Seminis modo spargenda sunt, quod quamvis sit exiguum, cum occupavit idoneum locum, vires suas explicat et ex minimo in maximos auctus diffunditur.[...] . Eadem est, inquam, praeceptorum condicio quae seminum ; multum efficiunt, et angusta sunt.* »
- (10) リプシウスの書簡セオリーについては次。M. Fumaroli, « Genèse de l’épistolographie classique : rhétorique humaniste de la lettre, de Pétrarque à Juste Lipse », in *RHLF*, nov.-déc., 1978, n° 6, pp. 886-905 ; « Rhétorique

- d'école et rhétorique adulte : remarques sur la réception européenne du traité "Du sublime" au XVI<sup>e</sup> et au XVII<sup>e</sup> siècle », in *RHLF*, jan.-fév., 1986, n° 1, pp. 33-51.
- (11) C. Mouchel, op. cit., pp. 197-198. また本性の真実性への仄めかしはセネカ書簡 41 における「内なる神 *Deus intus*」とも関連するであろう。Sénèque, op. cit., ep. 41, 5, « *Vis isto diuina descendit : animum excellentem, moderatum, omnia tamquam minora transeuntem [...].* »
- (12) 『エセー』における「仄めかし」の効果については、G. Mathieu-Castellani, « Dire, Signifier : La Figure de la *Significatio* dans les *Essais* », in *MS*, vol. III, 1991, pp. 68-81.
- (13) III, 9, 1040, « Je m'esgaré : mais plustost par licence, que par mesgarde : Mes fantasies se suyuent : mais par fois c'est de loing : et se regardent, mais d'une veue oblique. »
- (14) *Ibid.*, 1041, « J'entends que la matiere se distingue soy-mesme. Elle montre assez où elle se change, où elle conclud, où elle commence, où elle se reprend : sans l'entrelasser de parolles, de liaison, et de cousture, introduictes pour le service des oreilles foibles, ou nonchallantes : et sans me gloser moy-mesme. »
- (15) *Ibid.*, « Puisque je ne puis arrester l'attention du lecteur par le poix : *manco male*, s'il advient que je l'arreste par mon embrouilleure. »
- (16) また他のところでは、I, 40, 276, « La fortune ne nous fait ny bien ny mal : elle nous en offre seulement la matiere et la semence : laquelle nostre ame, plus puissante qu'elle, tourne et applique comme il luy plaist : seule cause et maistresse de sa condition heureuse ou malheureuse. » (Nous soulignons) とあるが、ここはセネカ書簡 98, 2 のパラフレーズなので、話題としての「種子」はモンテーニュ独自の使い方だといえる。
- (17) *L'âge de l'éloquence*, Genève, Droz, 2009, pp. 514-516, とくに notes 195 et 196.
- (18) *Les oeuvres morales & meslees de Plutarque, translatees du Grec en François par Messire Iacques Amyot...*, Paris, Michel de Vascosan, 1572, 25B, « il est certain que qui voudroit totalement priuer vn ieune homme d'ouïr, sans luy faire gouster aucunement la raison, non seulement il ne produiroit de soy-mesme ne fruit ne fleur quelconque de vertu, mais au contraire il se tourneroit au vice, mettant hors de son ame, ne plus ne moins que d'une terre non labouree & delaissee en friche, plusieurs reiettons & germes sauages » ; 149H-150A, « Il n'y eut iamais femme qui feist enfant toute seule sans auoir la compagnie de l'homme, mais birn y en a il qui font des amas sans forme de creature raisonnable, ressemblans à vne piece de chair qui prennent consistance de corruption : il fault bien auoir l'œil à ce, que le mesme n'adiuene en l'ame & en l'entendement des femmes. Car si elles ne reçoient d'ailleurs les semences de bons propos, & que leurs maris ne leur facent part de quelque saine doctrine, elles seules à par elles engendrent & enfantent plusieurs conseils estranges, & plusieurs passions extrauagantes. »
- (19) Cf. Érasme, *Ciceronianus*, ASD I-2, 681 ; Gambaro, 242, « *At hoc est nobis scribere, quod agro fructum producere, hoc nobis lectio, quod agro stercoratio : hoc nobis concoctio et emendatio, quod in agris occatio, pastinatio, putatio, zuzaniorum euulsio, ac reliquae operae, sine quibus aut non emergit sementis, aut non adolescit exortia.* »
- (20) エチエンヌ・パーキエは『エセー』をよく整えられた花壇ではなく、多種多様な植物が生えた草原だと評している。「Tout son Livre n'est pas proprement un parterre, ordonné de divers carreaux et bordures ; ains comme une prairie diversifiée pesle-mesle et sans art de plusieurs fleurs. » dans *Les Lettres d'Estienne Pasquier*, Paris, Jean Petit-Pas, 1619, t. II, p. 337 sq.
- (21) M. Fumaroli, op. cit., p. 445, « [...] le seul chef-œuvre qui leur [aux remontrances d'ouverture] soit apparenté,

- les Essais de Montaigne, n'a pu naître qu'à l'écart des rites officiels de l'institution parlementaire, dans un effort solitaire pour faire servir l'impersonnelle "rhétorique des citations" à une quête individuelle, et à un style personnel. »
- (22) *Les Essais*, éd. Pléiade, note, p. 1827, une variante d'Exemplaire de Bordeaux : « C'est un'humeur scholastique d'estre plus jaloux de l'honneur de l'allegation que de l'invantion : et que nous autres naturalistes condamnons estrangement. »
- (23) III, 12, 1103, « et parmy tant d'emprunts, suis bien aise d'en pouvoir desrober quelqu'un : le desguisant et diffonnant à nouveau service. »
- (24) Quintilien, *L'Institution oratoire*, texte établi et traduit par Jean Cousin, Paris, Les Belles Lettres, 1976, II, 19, 2-3, p. 102.
- (25) Joachim du Bellay, *La deffence, et illustration de la langue françoise (1549)*, édition et dossier critiques par Jean-Charles Monferran, Genève, Droz, 2001, p. 81. デュ・ベレーのこの考え方は、パドゥアの人文主義者スペローニ Sperone Speroni (1501-1588) が 1542 年に発表した『言語についての対話 *Dialogo delle lingue*』に多くを負っている。デュ・ベレーの「良い農夫 bons Agriculteurs」は、スペローニの「*ottimi agricoltori*」の訳であるが、これは先に引用したクインティリアヌスの「最高の農夫 *optimus agricola*」にほかならない。
- (26) Cf. I, 10, 62, « Nous disons d'aucuns ouvrages qu'ils puent à l'huyle et à la lampe, pour certaine aspreté et rudesse ; que le travail imprime en ceux où il a grande part. Mais outre cela, la sollicitude de bien faire, et cette contention de l'ame trop bandée et trop tendue à son entreprise, la rompt et l'empesche [...]. » また次の論文も示唆的。M. Magnien, « L'entrée en scène de la rhétorique (Essais, I, 9& I, 10) », in *Les chapitres oubliés des essais de Montaigne*, Actes des journées d'étude à la mémoire de Michel Simonin, University of Chicago (Paris), 9 avril et 5 novembre 2010, textes réunis par Philippe Desan, Paris, Honoré Champion, 2011, pp. 31-46.
- (27) こうした戦略はすでにエラスムスがビュデへの書簡で述べている。イタリア人文主義の過度の技巧性を批判する文脈において次のように述べている。「Si tu penses que la majesté a sa source dans le style même, j'ai tendance pour ma part à considérer que le discours le plus magnifique est celui qui est le plus efficace à exprimer ce qu'il s'est proposé [...] Le comble de l'art est de dissimuler l'art, parce que l'artifice trop visible nous détourne de faire confiance à l'auteur [...]». Un vêtement ne peut être à la fois somptueux et pratique, ni le discours propre en même temps à émouvoir les âmes et à faire briller le talent de l'orateur. Ainsi le meilleur archer n'est pas celui dont le carquois est incrusté de pierres précieuses, ou dont l'arc est le plus voyant, mais celui qui frappe la cible de la main la plus sûre. » dans *La correspondance d'Érasme et de Guillaume Budé*, traduction intégrale, annotations et index biographique par Marie-Madeleine de la Garanderie, Paris, J. Vrin, 1967, p. 109. (強調は引用者)
- (28) Quintilien, *éd. cit.*, IV, 1, 57, « *Sed ipsum istud euitare summae artis* » Voir aussi, IV, 1, 9 ; IV, 2, 127 ; Aristote, *Rhétorique*, III, 7, 1408b18-21. Sur ce thème, voir la thèse de Déborah Knop, « La cryptique chez Montaigne », Thèse doctorat, sous la direction de Francis Goyet, soutenue à l'Université Stendhal Grenoble Alpes le 8 décembre 2012, とくに ch. 13, pp. 339-360.
- (29) Quintilien, *éd. cit.*, XI, 3, 11, « *nihil credimus esse perfectum, nisi ubi natura cura iuuetur.* »
- (30) Cf. Ps. Longin, *Traité du Sublime*, trad. N. Boileau, introduction et notes de Francis Goyet, Le Livre de Poche, 1995, p. 108, 22.1, « Et à dire vrai, l'art n'est jamais dans un plus haut degré de perfection, que lorsqu'il

ressemble si fort à la nature, qu'on le prend pour la nature même ; et au contraire la nature ne réussit jamais mieux que quand l'art est caché. » また M. Magnien の次の論文も見よ。 « Montaigne et le sublime dans les Essais », in *Montaigne et la rhétorique*, éd. O'Brien, Paris, H. Champion, 1995, pp. 27-48, とくに pp. 36-39.